

山本麻子著「ことばを鍛えるイギリスの学校—国語教育で何ができるか」岩波現代文庫 岩波書店
2012年12月14日刊を読む

幅広い「書く」教育

作文・物語・論文・新聞記事まで

小さいときから幅広い「書く」機会

1. (1)①イギリスの新聞や雑誌は量も種類も豊富だ。
 - ②そして、絶え間なく送られてくる種々のダイレクトメールには圧倒されてしまう。
 - ③新聞についていえば、平日のものは70ページくらいだからまだよいが、土曜日や特に日曜日のものはもっと分厚くて、大切そうなところだけを読もうとしても、とても全部など読めるものではない。
 - ④読まれることを想定して作ってはいるのだろうが、裏を返せば読む方ばかりでなく、書き手も多いということだ。
 - ⑤またそれだけでなく、一つの記事の分量も多い。
 - ⑥何しろ書きたい、書いて主張したいと思っている人が日本よりはるかに多いのは確かだし、彼らに書かせる機会を与える人も多いのだから、このような事象は当然といえば当然なのだろう。
- (2)①イギリスの学校では「幅広くたくさん読む」という経験を小さいときからさせようとしているが、同時に、「幅広くたくさん書く」経験もさせる。
 - ②「読むこと」と「書くこと」は表裏一体だから、どうやって読んだらよいかを学ぶことは、どうやって書いたらよいかということに直接つながってくるのだ。
- (3)①ナショナルカリキュラムによると、初等教育の最も初めの学習段階である五歳から七歳のころから、子どもたちは書くことを楽しみ、その価値がわかるように指導されることになっている。
 - ②物語やノンフィクションの読み物を通じて意味を伝えるということを学んだり、綴りや句読点の使い方なども学ぶ。
 - ③また、いろいろな書き方の形式に幅広く触れ、それぞれの特徴を学ぶことが大切であるとされている。
 - ④こうした「書く」形式としては、たとえば、お話などの物語的なもの、詩、メモ、項目リスト、見出し、記録文、伝言文、指示文などさまざまである。
- (4)①イギリスの子どもたちは、ペンや鉛筆をやっと持ち始めた五、六歳のころから、「書く」ということについて、その目的や、対象となる読者や書く形式などに関する知識と技術を学び、理解を深めるように指導される。
 - ②書く目的には、
 - (ア)「他の者に伝える」

- (イ)「想像上の世界を創作する」「経験を探る」
(ウ)「情報を整理し説明する」などがあるという。
- ③また、子どもたちは、「書く」ことの価値が「ものを記憶したり、考えを発展させる」というところにもある、と教えられるそうだ。
- (5)①このように、教師は「書くこと」を通じて、これが、思考、学習、伝達的手段であり、かつ楽しみの源泉でもあることを児童に教えなくてはいけないのである。
- ②だから、そのための児童の自主的な試みや実験的精神を尊重し励ましてやらなければならないということなのだろう。

学校が始まったころ

- (6)①三男は四歳半を過ぎたとき、学校に行き始めたが、すぐ、アルファベットを書く練習を始めた。
- ②英語は文字と読み方が日本語のひらがなのようにきれいに対応しているわけではないから、単語の習得も時間がかかる。
- ③それでも、まともに単語も書けないような時期から、絵といっしょに自分の体験を表した文章を書き始めたのには驚いた。
- ④絵日記のようなものといえるが、それよりはずっと単純で簡単な絵に添えて文が一つだけ書いてある。
- ⑤たとえば、「週末にレゴで遊びました (At the weekend, I played with lego.)」とか、「花火を見ました (I saw a firework.)」などの文が書いてある。それから少し経つと、一つに絵に文を二つ以上書くようになった。
- ⑥「クリスマスにプレゼントをもらいました。ロボットでした。それは車に変形します) (In Christmas I had presents. It was a robot. It can change into a car.)」。
- 何とか自分で書いたらしく、文頭の大文字や誤字が随分訂正されていた。文字や単語だけでなく、早くから「文」というものを書かせたのは、そうした概念に早いうちから敏感にさせようとしたのだろう。
- (7)①初等教育の半ばから後半に向かう七歳から十一歳といった時期になると、子どもたちは、先に述べた「書くことが思考と学習にはきわめて重要なものであり、作業自体が楽しいものだ」という理解をさらに深める。
- ②英語を書くときの規則や約束ごとを学んだり、また、同じ意味を表すために英語の使い方も多様になり得るということも学び始める。
- ③また、よりよい作品に仕上げるために、「構想立て」「草稿作り」「修正」などの段取りを踏むことも学ぶ。
- ④実際にどのようなものを書くのが望ましいかという、物語、詩、劇の脚本などのほか、報告、説明、意見、指示、評論、解説などである。
- ⑤このように、「広範に書く」といった中には、物語、詩、劇の脚本を創作することなど、想像力を必要とするものが多いが、逆にそうしたものを書いているうちに想像力が養えるという面もあるだろう。

七歳で「本」作り

2. (1) ①三男が七歳から八歳にかけてのころ、学校の授業の一環として、物語作りをした。ある程度の長さのストーリーを書いて、最終的に本(book)の形式としてまとめたのは、たぶんこれが最初だっただろう。
- ②すべての作業は学校で行われたので、学年末のスピーチデイの催しのときに各児童の作品を初めて見る機会があった。
- ③七歳ぐらいの子どもでもこんなことができるのかと思い、印象に残っている。
- (2) ①息子の作品は、一人の勇者の怪獣倒しという主題で、『死の城(The Castle of Death)』という話だった。
- ②ある国の王子である勇者が、アメリカにある死の城に住んで悪事を働く怪獣を征伐するために、家来の魔法使い(wizard)と侍(warrior)を伴って出かけ、最後に目的を果たすという筋だった。
- ③何となく『桃太郎』の話のようでもある。
- ④登場人物全員の名前が息子のクラスの友人の名前であったり、その外見や性格の記述が彼らとそっくりであったり、怪獣倒しにまつわる日にちが友人の誕生日であったり、と材料はごく身近なところから得ていた。
- ⑤また、「死の城」の扉に突き刺さった輝く剣を勇者がわけなく抜いてしまうところは『アーサー王伝説』みたい、と思わず笑ってしまった。
- (3) ①全部で四つの章から成っており、記述と説明が中心の地の文と多くの会話からできていた。
- ②物語の始めは、「昔々、あるところに勇者が住んでいました。大変強いのでだれもこの勇者を倒すことができませんでした」というように伝統的な書き出しで、話の体裁を使うようにと教えられたことの表れかと思う。
- ③出来上がりは A5 判で 16 ページ、半分は鉛筆で書いた挿絵で、挿絵の内容は本文と合っている。
- ④最後に「終わり(The End)」とあった。
- ⑤話自体は単純であったが、一つのストーリーとして完結し、さらに、一冊の本という形にまとめられていた。
- ⑥綴りや文法の間違いも多くあったが、要は、子どもにこうした試みをさせたということである。
- (4) ①このような本作りの試みは英国では比較的一般に行われている。
- ②息子たちの場合は内容に重きが置かれ、本のサイズも紙も指定されていたが、学校や教師によっては、本の体裁により焦点が当てられることもある。
- ③サイズも形もまちまちで、紙の色も質も自由に好きなようにデザインすることもできる。
- ④工作の一部にもなりそうなこうした本作りは、子どもにはとても喜ばれるという。
- ⑤本作りの作業の効用は、子どもたちが書く内容の構成の仕方、内容の提示の仕方を学んだり、文字や単語の練習、語彙を豊富にしたり、文法の確認にもつながることだ。
- ⑥そして、友達と見せ合うことでアイディアを交換することにもなる。

「詩集」作りと詩作

3. (1) ①「詩」の学習はナショナルカリキュラムのどの学習段階でも重要視されている。
- ②三男の場合、七歳のとき、自分の好きな詩をいくつかきれいに書き写し、「詩集」としてまとめる作業をした。
- ③子ども用の詩集から気に入ったものを四、五篇選んで、そのまま紙に写し、そこに書かれてある挿絵も色鉛筆で書き写す。写すだけの作業ではあるが、ハンドライティングの練習に役立ただけでなく、詩に使われるいろいろな提示形式、たとえば行替えや字下がりにすることなどを学ぶという意味でためになった。
- ④厚紙で表紙をつけ、「自分の選んだ詩集」と題して、各自表紙をデザインし、作品として仕上げた。
- (2) ①詩の創作では、息子たち三人とも同じように試みたものがある。
- ②自分の名前を題名にして、それをまず、アルファベットで縦書きにし、そのアルファベットから句や文を始めて、自分に関する内容のその行を完成させるというものだ。
- ③こうした手法は、学校の文集などでもよく見るので一般的なものなのだろう。「形式」を覚えさせるためのよい手法だと思った。
- (3) ①子どもたちの「英語」のノートを見ると、十一歳から十三歳のころ、詩を書く頻度が増えたのがわかる。
- ②こうした作業があまり好きとはいえない息子たちにとっては面倒なことのようだったが、授業で扱うし、友人が皆やるので仕方なくやっていたようだ。
- ③それでも回数を重ねるにつれ、要領がよくなった。
- (4) ①上の息子の一人が十歳のときに「迷信」を題にして詩を書くという課題が出た。
- ②抽象的な題で、何から始めたらよいか首を傾げそうだが、次のような創作の手順が示してある。
- ③これならだれでもできそうだ。
- ④「今まで聞いたことのある迷信をいくつか選びなさい。そして、それぞれについて、「詩」の中の一部となるような文を考えなさい」と書かれてあり、例がある。
- (5) ①例では「僕は知っている(“I know”)という書き出しで始まっていて、このままの書き出しを使ってもよいし、または「人は言う(“People say”)や、「僕は時に信ずる(“Sometimes I believe”)」、「次のように聞いた(“I heard”)」を使ってもよいとあった。
- ②息子は、「人は言う(“People say”)」から始めていた。
- ③締めくくりは、例では、「僕は知っている、そう僕も知っている(“I know it - Yes I know it”)」というものが使われていた。
- ④指示には、「これらの迷信を君がどう考えているかを示す文で終わらせなさい」とあった。
- ⑤息子は、自分の挙げたいくつかの迷信について、「下らない、下らない、僕はこんな信じられない(“Rubbish - Rubbish / I can't believe it”)」で結んでいた。
- ⑥抽象的な題を与えられて、とても難しそうだと戸惑う子どもたちにとっては、こうして書き方のルールを敷いてくれると書きやすくなるものだと感心した。

中等教育課程では

4. (1) ①このように初等教育の段階で、すでにいろいろなものを書く経験をしているはずであるが、十一歳から十六歳の中等教育段階の生徒たちは、さらに、広範で多様な書き物をすることになっている。
- ②例を挙げると次のようなものだ。
- ③「物語、詩、劇の脚本、自叙伝、映画のシナリオ、日記、議事録、報告書、パンフレット、計画書、小冊子、広告、論説、新聞記事、意見を含んだ手紙、批評、評論、小論文」など。
- (2) ①特に、物語、詩、劇の脚本などの部類に属するものはだれもが必ずいくつかは書くようだ。
- ②これを見ていると、イギリスではどんな子どもでも作家や小説家、劇作家の卵のような経験をするのだと思った。
- (3) ①ここで新聞記事と報道文、それに、劇の脚本書きの例を一つずつ紹介してみよう。
- ②三男は十二歳のころ、英語の時間にシェイクスピアの戯曲『マクベス』を読んだが、それをもとにダンカン王殺害をもじって「暗殺事件」と題して現代風の新聞記事にする練習をした。
- ③生徒たちは、この作業に先立って、お手本として背景情報を含めた「事件」の詳しい「新聞記事」を渡された。
- ④そこには、「血に染まった王」という大きな字で書かれた見出しの下に、それぞれ小見出しがついた五つの記事があり、マクベスの顔写真と、事件の直前にダンカン王とマクベスが宮廷で挨拶を交わしている写真が載っている。
- ⑤教師がどこからこんな記事を準備したのかわからないが、もともとが作り話だから、これらの写真もどこかで上演された劇からのスナップなのだろう。
- ⑥この「新聞記事」を参考にして、生徒たちはそれと同じテーマで、新聞形式に従ってページを作成するという課題を与えられた。
- (4) ①息子は、デイリー・メールという英国のタブロイド判の新聞を作るという想定で、その1ページを創作した。
- ②「ダンカン王殺害か」を題として、殺害の報道をスコットランドの最北端インバネスからの特派員の立場で書き、「次期王はマクベスか」と題する外交報道官の立場からの発表、さらに、「マクベスのなせる仕業か」と題するマクベスへの疑惑を示唆するデイリー・メール社の本社スタッフの立場からの記事も書いた。一つ一つが教師から渡された参考記事よりはだいぶ短くなっていたが、見出し、活字の大きさ、レイアウトなどについての学習をしたり、事実の報道の書き方、見解の示し方などを学んだのだろう。
- ③もともとが虚構であるものを題材にとり、新聞記事を書くのだから、想像力をたくましくしなくてはいけない。それについても学んだはずだ。よい経験になったと思う。
- (5) ①『マクベス』については、息子は、新聞記事のほか、「マクベス報告」と題するテレビのニュース・レポートも書いた。

②英国のテレビ局の一つである ITN の夜 9 時のニュース用原稿という想定だった。「こんばんは。ITN ニュースです。昨日恐ろしいことが起こりました」で始まり、「これで 9 時のニュースを終わります」で締めくくっている A4 判 1 ページ程度のものだ。

(6)①内容の一番目は、ダンカン王がマクベスの居城で死体となって発見されたこと、大学教授であり著名な探偵の鑑定によると、凶器としては短剣が使われたらしい。

②この探偵の名前は息子の友人の名前だった。

③二番目は、マクベスが次期の王になるのではないかという周囲の憶測の報道だった。

④また、ニュースの最後に…。

P125 ~ P133

<コメント>

日本とイギリスを比較してだから、イギリスの言語教育(母国語教育)は素晴らしく、日本はまだまだだというのは簡単だが、では日本の国語教育はなぜこのような状況に至ったのか、本来の母国語教育(日本語教育)はいかにあるべきかを少し落ち着いて考えることが「教育立国」日本への第一歩かと考える。その意味でも、山本先生の本著は参考になる。

2020年12月1日(火)